
冬休みにあった それだけの話

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬休みにあつた それだけの話

【Nコード】

N3677B

【作者名】

滾

【あらすじ】

冬休みにあつた話。それ以上でもそれ以下でも無い、っていうそれだけのお話。

一日目 祖父の入院

祖父が入院した。

祖父、というのは母方の祖父の事で、父方の祖父は僕が中学生の時に亡くなっている。

基本祖父は病気をするような人ではなかったために、僕等は少し心配していたのだが、祖母の話を聞く限りさほど大変な事では無いらしい。

なので僕等は祖父の家に泊まりがてらのお見舞い、基、お見舞いがてらのお泊りに行くことにした。

ついでにお年玉も貰ってしまおうという魂胆である。

しかし、祖父の家は敷地こそ広いものの相当古い。というかぼろい未だにトイレ、というか便所は外にあるし、お風呂も外にあってもその電灯が点かない。

畑があつて、そこで野菜を作ったりしている。

そんな家で、祖父と祖母は叔父と一緒に暮らしているのである。

祖父の家について、新年の挨拶をしてから早速祖父の入院している病院に向かう。

祖父の入院している病院はそれほど大きくなく、三箇所さんかという事もある。あつて患者さんはほぼ居なかった。

二階にあるという祖父の部屋に、道順を覚えるようにして母と祖母と妹と僕で向かう。

途中で見かける患者さんは恐らくほぼ入院患者さんで、更にその殆どがお年を召した方ばかりだった。まあ、中には小さい子も数人見受けられたけれど。

そんなこんなで、祖母について歩いているうちに祖父のネームプレートが出ている大部屋を見つけた。

シャッターで区切られている祖父のスペースに、シャッターを無造

作に開けて入っていく。

久しぶりに見た祖父はそれほど狼狽しているようでもなく、僕は少し安心した。

何だ、来たのか。とぶっきらぼうに言っただつもりだろうが、祖父の顔は綻んでいた。

祖父が入院した理由は熱病で、今の所熱は引いているが何故熱が出ているのかという原因が解らないらしかった。

まあ、それでも元気がないわけではなく、会話も全然できるようだった。

僕は妹に、「久しぶりの親子水入らずをさせてやろう」と言い、二人でそつと席を外した。

と、言つても特にする事もないため、僕と妹は連れ合つて病院内をふらついた。

さつき来た廊下を、逆回しで歩いていく。

院内は暖気があまり聞いてなく、建物の中なのに息が白かった。

「ん？」

回り角を曲がつて少しのところに、一人の女の子の姿が見えた。

小学校高学年か、それとももう中学校に入っているのか。それくらいの歳の頃の少女。

壁に手をついて、苦しそうにしている。

大丈夫だろうか……。

そんな事を思っていると、

「あ」

その子が急に吐いた。

そのまま蹲つて、苦しそうにしている。

わ、どうしょ……。

何て思っている内に、突然僕の隣から妹がその子に向かって駆け寄つていった。

その子の体を支えるようにして、背中をさすっている。

僕も遅れて駆け寄つて、なにが出来るでもなく「大丈夫？」と言つ。

と、

「看護婦さん！」と妹が僕を見上げて叫んだ。
つれて来い、という意味だろうという事はすぐに解った。

「あ、おう！」

僕は頷くと、近くのナースステーションに居た看護婦さんを急いで連れてきた。

「大丈夫！？」と看護婦さんがその子を抱き起こして、病室まで連れて行く。

僕と妹は半ば取り残される形で役目を終えた。そのまま、しばらくそこでぼう、っとしていた。

何か、僕は情けなかった。

帰り際、妹がポツリと、

「あの子、血も吐いてた」
と言った。

「そうか・・・」

僕は呟いた。別に、なにが出来ても無いし。

でも、と、吐く白い息を見て思う。

あの子は、こんなお正月を何回もここで過ごしてきたのだろうか・・・と。

僕は「そうか・・・」ともう一回呟いて、

妹と一緒に母達が待つ病室へと戻っていった。

一日目 祖父の入院（後書き）

遅ればせながら、新年明けましておめでとうございます。
今年も去年より増して頑張っていきたいと思えますので、よろしく
お願いいたします。

二日目 話し相手

祖父の家で一昔前の暮らしを満喫して、二日目の朝を迎えた。

起きてから昼ごろまでお正月の特番を見、そうして再び祖父が入院する病院に向かった。

昨日と同じ道を通って、病院に向かう。

病院は昨日と同じように人は少なく、駐車場には車がほとんど無かった。

すれ違う人の居ない廊下を、昨日よりも幾分か早いスピードで歩く。祖父の部屋にはやはり昨日より早くつくことが出来た。

祖父は昨日よりも元気そうで少し安心した。が、依然として熱の原因は解っていないらしい。

それはまだ不安の種のままだが、それでも笑顔で話をする祖父はやはりうれしそうで、それを見て僕はお見舞いに来て良かったと思えたのだ。

暫く話をしていると、祖父がふとオレンジジュースが飲みたいと言った。

それじゃあ、と、僕が席を立つ。下の売店で買ってくるのが一番早い。

じゃあ私も、と、妹と一緒に席を立つ。結局、昨日と同じ形で僕と妹は病院内を二人で歩くことになった。

昨日と同じように、来た廊下を逆回しに辿る。

昨日と違い、今日はお年寄りとすれ違わない。大部屋の扉は開いてるから中が見える。そこから患者さんが見える程度だ。

まあ、だから何っていうわけじゃあないけど。

曲がり角を曲がって、昨日僕と妹が女の子を助けた場所に来た。

今日はさすがにあの子の姿は無く、一瞬妹と顔を見合わせたものの普通にその場を通り過ぎた。

通り過ぎて数歩のところ。

「ん？」

僕は背中につつかれるような感触を感じ、振り返った。

「あの」と声をかけて来たのは、確か僕が昨日ここに呼んだ看護婦さんだ。

「はい？」

僕と妹は立ち止まって、看護婦さんの話を聞いた。

聞くに、昨日のあの子とそこそこの両親が昨日の事に関してお礼を言いたいと言っているとの事。

一瞬考えたが、別に断る理由はどこにもないため、僕と妹は頷いて、病室まで看護婦さんに案内してもらった。

今来た道を少し戻って、その病室に着く。何回か前を素通りしていた場所だった。

どうやら祖父の居るような大部屋ではなく、一人だけが入る個室の病室らしい。

ナンバープレートが一人分しかない。

扉が閉まっているため、看護婦さんが扉をノックして、

「田中（仮）さん」

と、名前を呼ぶ。田中、と言うのがあの子の苗字らしい。

「はい」

と中から返事が聞こえて、ガラガラ、と同時に扉が開く。

中から、あの子のお母さんだと思われる女性が出てきた。

女性は僕と妹を見て一瞬怪訝そうな顔をされたが、何かに気付いたのか「ああ！」と顔を明るくした。

「昨日の件の・・・」

と看護婦さんが説明をしてくれる。それを、「はいはい」と、頷きながら女性は聞いていた。

「それでは」

看護婦さんはひとしきり説明を追えたと行ってしまった。と、女性が頭を下げて、「ありがとうございました」と。

「あ、いえいえ」とこっちも頭を下げて言う。

「ほら、早苗（仮）もこっちに来て御礼を言いなさい」

女性は言って、部屋の中を振り返った。

僕と妹も、一緒に部屋の中に視線をやる。

ベッドの上で半身を起しているあの子が、こっちを見ていた。

「あ、いいですよ別に。寝てもらって」

僕は首を振ったが、そう言っている間にもうあの子はベッドを降りてこっちに来てしまっていた。

お母さんの隣に並び、僕と妹にぺこりと頭を下げて、

「ありがとうございます」と言った。

小さくか細い、それでも精一杯搾り出したような声だった。

「いえ、大丈夫そうです」

「本当に、ありがとうございます」

お母さんはまた頭を下げる。

「いえいえ。あ、もう戻っていただいて・・・」

早苗ちゃんはそのなに体調が思わしく無いらしい。パツと見の判断だからそうとは限らないけど、まあ、病人にそんな長い話をさせるのは酷だ。

「そうですか？」と、お母さんは早苗ちゃんを見、「じゃあ、早苗、ベッドに戻って」と言った。

同時に、お母さんがこちらに一步を歩んで、扉を閉める。
何だろう？

首をかしげていると、ふたたびお母さんが頭を下げた。

下げて、「ありがとうございます」。

次いで、「あの・・・」と、何か言いづらそうな声で言う。

「お家はここら辺にあるんでしょうか・・・？」と。

お家、と言うのは、僕等の家のことだろう。

しかし残念ながら、僕の家と祖父の家は相当離れている。お正月でもないとなることが出来ない理由はそこにもあった。

その旨を伝えると、「そうなんですか・・・」と、何故かお母さん

の表情が暗くなった。

「あ、でも今日と明日はここにいるんですけどね」

僕の補足に、お母さんの表情が今度は僅かに明るくなった。

「祖父が入院しているので、そのお見舞いに帰ってきたんです」

「そうなんですか」

あ、別に今の補足は必要なかったか。

ともあれ、とつと戻らないと母さん達が心配するか、と僕は時計を見た。

と、お母さんが突然口を開く。

「あの・・・、今日と明日だけでもいいので、娘の話相手になってもらえないでしょうか？」と。

「え、はい？」

多分素っ頓狂な声を出してしまったのだろう。妹の視線が痛い。

「え？どういう・・・？」

「娘は長い間入院してまして、今ではもう友達すらお見舞いに来てくれなくて・・・。いつも一人で寂しそうにしているんです・・・」

「はあ・・・」

「今日と明日の二日だけでいいんです。二日だけ、あの子の話し相手になつてもらえませんか？」

お母さんは、そう言つてまた頭を下げた。

どうする？という意味を込めて、妹を見る。

妹も一瞬迷つたようだったが僕も別に異存は無く、

「はい、僕等でよければ」と二人して頷いた。

そんな綺麗な返事を出来ていたか定かではないが、そんなような事を言つた。

かくして、僕と妹は二日間の友達を得たのだった。

決して広くない室内。

ベッドが合つて、椅子が二脚。テレビに点滴があつて、人が五人も

六人も入ったらもう窮屈な、そんな室内。

けど、一人で居るには確かに広い、そんな中途半端な広さの病室だった。

早苗ちゃんは、ずっとこんなところに居るのだと言う。

三年前からずっと病院に入院しているらしく、小学校の卒業式も出ることが出来ず、中学校にも一回も言っただけらしい。因みに、一年生だと言っていた。

最初お母さんに紹介された時は僕等も早苗ちゃんもぎこちなかったが、今は楽しそうに話をしている。

とは言っても、僕が会話に混ざることが出来たのは五分程度の事で、後は早苗ちゃんと妹だけで話をしている。

女同士では話が弾むのだろう。僕が間に入る隙間がどこにもない。それにしても、と僕は備え付け(?)の窓から外を見る。

別段何が見えるわけでもなく、ただ車が通る大通りが見えるだけ。こんな所にいれば、体調も悪くなるというものだろう。

母と祖母は事情を説明すると快く理解をしてくれた。今は近くのデパートで買い物をしている。多分戻ってくるのに二時間は掛かるだろう。

その二時間は、早苗ちゃんと話を出来る。まあ、僕は窓の外を眺めているだけだけど。

だけど楽しい二時間は、ブルブル・・・

すぐに終わるもの。

『もしもし?もう帰るから、挨拶して出てきなさい。駐車場で待ってるからね』

と、母から僕の携帯電話に電話があった。

それを妹と早苗ちゃんに伝える。

と、一瞬早苗ちゃんが悲しそうな顔をした。それを、僕は見てしまった。

それでも次の瞬間には笑顔を作って、「そっか」と早苗ちゃんは言

った。

「また明日も来るね」と、妹は病室の前で手を振った。
早苗ちゃんもベッドの上で手を振り替えた。笑顔だった。
駐車場に向かう途中妹が、

「楽しそうで良かった」と言った。

僕は「そうだな」と言っ て頷いた。

妹はさっきの早苗ちゃん表情には気付いていなかったようだ。ま
だ子どもだ。そう思う。

でも今は、子どもでいい。

そんな事を考えながら、僕は、僕と妹は駐車場に向かった。

三日目 帰る

延々ノリツツコミをかまし続けるといふ初夢から目を覚まし、僕は祖父の家での三日目の朝を迎えた。

と言ってももう11時に近く、おはよう、という挨拶が適当なのか迷う時間帯だった。

「いつまで寝てるの」と母に叱咤されつつ、朝飯兼昼飯を食べる。自分の家で食べるような軽い昼食ではなく、ちゃんと祖母が作ってくれた手作りの昼食だった。

そんな暖かい昼食を堪能して、しばらく外を散歩する。ちょっと歩くとくらいなら迷うことはないだろう。

外に出ると外気が肌を刺し、風がびゅう、と唸った。それでも、構わず歩く。

歩きながら、年に数回しか見ない景色を見て回る。

前に来たときと、隣の家の外観が少し変わっていた。それから母の通っていた幼稚園に新しい遊具が増えていた。

やはり、間を開けて来ると何かがいつも違っている。今この時も、時間は経っているのだと実感させられる。

そんな事を考えて、ふと、早苗ちゃんの事を思い出した。

あの子は、いつから病院あそこにいるんだろう。いつから、外の景色を見ていないのだろう。

自分の家の周りがどうなっているのかすら、あの子には確かめる術すべは無い。

せいぜい、両親から聞いて知る程度のものだろう。自分の目で違いを知ることが出来ない。

ずっとあの病室から見える景色だけを見て、歩きたい所も歩けず、平凡で楽しくは無いであろう生活を強いられている。

ああ・・・。と僕は空を見た。特に意味は無い。気分だ。黄昏れてみたかっただけ。

空は真つ青に晴れ渡り、雲がふよふよと浮いている。
帰ろう。

と、思った。帰ろう。

帰って、とつとと病院にいつて早苗ちゃんの話し相手をしてあげよう。

それがいい。と思った。

僕は踵を返すと、少し足早に家に戻っていった。

病院に着いた。今日から病院の営業が再開するらしく、患者さんがかなり多く居た。

駐車場も殆ど埋まっていて、車を停めるのが困難な程だった。

病院内をもはや慣れた足取りで歩いていく。やはり、昨日や一昨日とは違い、すれ違う人の人数は多かった。

一旦祖父の方へ行つて、顔を出す。

祖父はやはり元気で、何で入院しているのか解らないくらいだった。僕等が来ているから強がっている、という可能性も無いわけじゃないが。

ともかく、僕は祖父とそこそこの話をして、母に断つて病室を出た。妹も勿論ついてきた。

そして二人して、早苗ちゃんの病室に向かったのだった。

「あ、今日も来てくれたんだ」と、早苗ちゃんは僕等の顔を見て言つた。

病室の中にはご両親の姿はない。未だ来ていないのか、それとももう来て帰ってしまったかのどちらかだろう。

昨日と同じように、妹が早苗ちゃんのベッドに腰を掛けて、僕は備え付けの椅子に座る。

椅子に座ると、椅子はギシ・・・と音を立てた。

「晴れてるね」と、最初に口を開いたのは僕だ。

この部屋からも見える空は、やはり晴れていた。

「晴れてますね」

妹と一緒に、早苗ちゃんは空を見上げた。

残念ながら、この後僕は昨日と同じように殆ど会話に入る事は無かった。

ただ、早苗ちゃんに“空が青い”という事を伝えられた事は良かったと思う。

まあ、別に、早苗ちゃんだって今日の空が青い事くらい気付いていただろうけど。

数十分話をして、母からメールを貰って部屋を出た。

帰り際、やはり悲しそうな顔を一瞬見せて、早苗ちゃんはそれでも手を振って笑顔で僕等を見送ってくれた。

「ああ・・・、そういえば・・・」

と、僕は車に戻る間際呟いた。

「何？」

と、妹が首をかしげる。

「俺等、今日帰るって早苗ちゃんに言っておいたっけ？」

「あ・・・、どうだろう・・・。お母さんが言ってくれたんじゃないかな？」

「そうか・・・」

そうだいいな。と思う。

そうだいいな。と。

見上げた空は、やはりどこまでも澄み切っていた。

ずっとこのまま晴れていれば。

そんな事を考えて、僕等は車に戻っていった。

三日月 帰る（後書き）

最終話じゃないです。まだあと一話ありますので、お付き合いください。

四日目 挨拶

四日目の朝だ。

僕はまだ祖父の家に居る。

本当は昨日帰るはずだったのだが、昨日帰り際に車の中で母が「もう一泊していこうか」と言ったので、急遽そういう事になった。

しかし、今日は病院に少し寄って挨拶だけして帰るだけ、という条件つきだった。

それでも、と僕と妹は頷いた。それでもいい。と。

さて、と、僕は布団から這い出て外を見た。外は昨日の晴れ空とは打って変わって、黒い雲が空を覆って、強い雨が降りしきっていた。「行こうか」と、部屋の扉の向こうから母が言った。

「行こう」と、母には見えないだろうに、僕は頷いて言った。

外は、太陽の光が無いためにいつもより一層寒かった。

そんな外気に身を震わせながら、帰り仕度を済ませて乗り込む。

今日は祖母はついてこない。もう僕等は病院に行った足で家に帰るからだ。

「また来やあよ」

祖母が傘をさして、手を振って言った。

「また来るよ」と、僕等も車の中から手を振った。

祖母は、見えなくなるまで手を振り続けていた。

病院に行く道中、雨脚が更にひどくなった。

とてもじゃないが、防水性のコートでも着ていない限り外には出れないほどだ。

傘さえあれば良いのだが、残念なことに、車の中に傘は置いてなかった。祖母の家の傘は、祖母が見送り際に持っていたあの傘一本だけだった。

「どうしよう・・・」

と、妹が助手席に座って呟いた。

別に返答を求めるようではなかったため、僕は何も言わずに外を見ていた。

雨が少しでも止んで、妹が早苗ちゃんに挨拶ができれば良い。そんな事を考えながら。

予想外だった。

雨もそうだが、車が駐車場に停められない、という状況だったのだ。車が一杯で、母が運転する車が停められない。

いよいよ挨拶することが困難になってきていた。

「お兄ちゃん」

と、不意に妹が助手席から僕を呼んだ。

「何だ？」

僕は外から視線を妹に移動させる。

妹はこつちを振り返ることなく、前を向いたまま言った。

「行ってきた」と。

「は？」

「コート着てるのお兄ちゃんだけじゃん。私着てないから、こんな雨の中行ったら塗れちゃうし」

「・・・・・・」

「早く。後ろ、車来てるから」

「解ったよ」

僕はフードをかぶって、雨の降りしきる外に出た。

病院まで小走りで駆けながら、妹が最後まで後ろを振り返らなかった事を思い出す。

アイツも行きたかったろう。が、この雨ははっきり言って「行きたくないなら行けばいい」とかいう事じゃ片付けられないくらい激しい。ちゃんと挨拶しないと。

病院に走りこんで、そう思った。

昨日よりも多い患者さんを避けながら、フードを外して病院内を少

し早足で歩く。

別に急ぐ必要な無いのだけど、何故か足が勝手に進んだ。
もう慣れた足取りで、早苗ちゃんの病室に急ぐ。

これが、多分見納めになるだろう。もう来ることは無い。

次に来た時に、多分僕は早苗ちゃんの事は覚えていないだろう。

そういうものだ。ふとしたきっかけで思い出すことはあっても、お

見舞いに来るかといわれればそれは無いだろう。

だから、せめて最後に挨拶はしておきたかった。

次の曲がり角を曲がったら、病室が見える。

曲がって、病室の前に来た。

「・・・・・・・・？」

ふと、僕は気付いてしまった。

早苗ちゃんのナンバープレートが、扉の横についていなかった。

ドクン

嫌な予感がする。

僕はコンコン、と閉まっている扉をノックした。

「・・・・・・・・」

返事は無い。

もう一回、ノックを試してみる。

「・・・・・・・・」

やはり、返事は無い。

恐る恐る、僕は扉の取っ手に手をかけた。

その手は、確かに震えていた。

ガラガラガラ

開いた扉。開けた視界。

その視界の中に、早苗ちゃんの姿は無かった。

何も無い、無機質な部屋。

昨日あった早苗ちゃんの私物も、何も残っていない。
何故だろう……。

僕は考えた。

考えたくは無かった。と、いうより、答えは解っていたんだと思う。
が、認めたくなかった。

まだ、確証はない。

僕は扉を閉めて、ナースステーションに向かった。

早苗ちゃんがどうしたのか、聞きたかった。

できれば、あの日僕が呼んだ人が良かったが、居なかった。
だから、他の人に聞いた。

「号室の田中さん、って……」

どうなったんですか？

すると、看護婦さんは少し苦い顔をして、教えてくれた。

そうですか。と、僕は答えて帰っていった。

ああ、どうだろう。「そうですか」なんて言えていただろうか。
解らない。覚えていないから。

変える途中、祖父の部屋に顔を出した。

帰るという事を伝えると、祖父は少し悲しそうな顔した。

「じゃあね」と、僕は笑った。と思う。

笑えていただろうか。解らない。覚えていないから。

車は向かいの建物の駐車場に停めたとメールが来た。

僕は外に出て、歩いて車まで向かった。

しこたま、雨に打たれた。

それでも良かった。寧ろ、そのほうが良かった。

理由は、……わかるだろう？

妹が、早苗ちゃんの事を聞いてきた。

「ああ、元気だったよ」と、ぬれた髪を拭きながら、僕は言った。

元気だったよ。

「そっか」と、妹は笑った。

やっぱり、お前は子どもだ。と、思った。

だから、それでいい。

子どものままでいい。

僕の今の表情を、読み取れなくて良い。

多分、僕は祖母の家に帰るたびに思い出す事になるんだろうと思う。
お見舞いには、やっぱり行けない。行く事は出来ない。

それでも、きつと。

僕は、彼女の事を、思い出の中にしまったまま、忘れる事はないんだろっな。

そんな事を思つて、僕は外を見た。

雨は、やはり強く地面を打ちつけているばかりだった。

四日目 挨拶（後書き）

最終話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3677b/>

冬休みにあった それだけの話

2010年12月18日17時38分発行